一握の砂

石川啄木

青空文庫

目次

我を愛する歌　5
煙　40
秋風のこころよさに　64
忘れがたき人人　76
手套を脱ぐ時　108

函館なる郁雨宮崎大四郎君
同国の友文学士花明金田一京助君

この集を両君に捧ぐ。予はすでに予のすべてを両君の前に示しつくしたるものの如し。従つて両君はここに歌はれたる歌の一一につきて最も多く知るの人なるを信ずればなり。

また一本をとりて亡児真一に手向く。この集の稿本を書肆の手に渡したるは汝の生れたる朝なりき。この集の稿料は汝の薬餌となりたり。而してこの集の見本刷を予の閲したるは汝の火葬の夜なりき。

著者

明治四十一年夏以後の作一千余首中より五百五十一首を抜きてこの集に収む。集中五章、感興の来由するところ相邇(ちか)きをたづねて仮にわかてるのみ。「秋風のこころよさに」は明治四十一年秋の紀念なり。

我を愛する歌

東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
蟹とたはむる

頬につたふ
なみだのごはず
一握の砂を示しし人を忘れず

大海にむかひて一人
七八日
泣きなむとすと家を出でにき

いたく錆びしピストル出でぬ
砂山の

砂を指もて掘りてありしに
ひと夜さに嵐来りて築きたる
この砂山は
何の墓ぞも

砂山の砂に腹這ひ
初恋の
いたみを遠くおもひ出づる日

砂山の裾によこたはる流木に
あたり見まはし
物言ひてみる

いのちなき砂のかなしさよ
さらさらと
握れば指のあひだより落つ

しっとりと
なみだを吸へる砂の玉
なみだは重きものにしあるかな

大という字を百あまり
砂に書き
死ぬことをやめて帰り来れり

目さまして猶起き出でぬ児の癖は
かなしき癖ぞ
母よ咎むな

ひと塊の土に涎し
泣く母の肖顔つくりぬ
かなしくもあるか

燈影なき室に我あり
父と母
壁のなかより杖つきて出づ

たはむれに母を背負ひて
そのあまり軽きに泣きて
三歩あゆまず

飄然と家を出でては
飄然と帰りし癖よ
友はわらへど

ふるさとの父の咳する度に斯く
咳の出づるや
病めばはかなし

わが泣くを少女等きかば

病犬(やまいぬ)の
月に吠(ほ)ゆるに似たりといふらむ

何処(いづく)やらむかすかに虫のなくごとき
こころ細(ぼそ)さを
今日(けふ)もおぼゆる

いと暗き
穴(あな)に心を吸(す)はれゆくごとく思ひて
つかれて眠る

こころよく
我にはたらく仕事あれ
それを仕遂(しと)げて死なむと思ふ

こみ合(あ)へる電車の隅(すみ)に
ちぢこまる

ゆふべゆふべの我のいとしさ

浅草の夜のにぎはひに
まぎれ入り
まぎれ出で来しさびしき心

愛犬の耳斬りてみぬ
あはれこれも
物に倦みたる心にかあらむ

鏡とり
能ふかぎりのさまざまの顔をしてみぬ
泣き飽きし時

なみだなみだ
不思議なるかな
それをもて洗へば心戯けたくなれり

呆れたる母の言葉に
気がつけば
茶碗を箸もて敲きてありき

草に臥て
おもふことなし
わが額に糞して鳥は空に遊べり

わが髭の
下向く癖がいきどほろし
このごろ憎き男に似たれば

森の奥より銃声聞ゆ
あはれあはれ
自ら死ぬる音のよろしさ

大木の幹に耳あて
小半日
堅き皮をばむしりてありき

「さばかりの事に死ぬるや」
「さばかりの事に生くるや」
止せ止せ問答

まれにある
この平なる心には
時計の鳴るもおもしろく聴く

ふと深き怖れを覚え
ぎっとして
やがて静かに臍をまさぐる

高山のいただきに登り

なにがなしに帽子をふりて
下り来しかな

何処やらに沢山の人があらそひて
鬮引くごとし
われも引きたし

怒る時
かならずひとつ鉢を割り
九百九十九割りて死なまし

いつも逢ふ電車の中の小男の
稜ある眼
このごろ気になる

鏡屋の前に来て
ふと驚きぬ

見すぼらしげに歩むものかも

何となく汽車に乗りたく思ひしのみ
汽車を下りしに
ゆくところなし

空家に入り
煙草のみたることありき
あはれただ一人居たきばかりに

何がなしに
さびしくなれば出てあるく男となりて
三月にもなれり

やはらかに積れる雪に
熱てる頬を埋むるごとき
恋してみたし

かなしきは
飽くなき利己の一念を
持てあましたる男にありけり

手も足も
室いっぱいに投げ出して
やがて静かに起きかへるかな

百年の長き眠りの覚めしごと
※呻してまし
思ふことなしに

腕拱みて
このごろ思ふ
大いなる敵目の前に躍り出でよと

手が白く
且つ大なりき
非凡なる人といはるる男に会ひしに

こころよく
人を讃めてみたくなりにけり
利己の心に倦めるさびしさ

雨降れば
わが家の人誰も誰も沈める顔す
雨霽れよかし

高きより飛びおりるごとき心もて
この一生を
終るすべなきか

この日頃

ひそかに胸にやどりたる悔(くい)あり
われを笑はしめざり

へつらひを聞けば
腹立(はらだ)つわがこころ
あまりに我を知るがかなしき

知らぬ家(いへ)たたき起して
遁(に)げ来(く)るがおもしろかりし
昔の恋しさ

非凡(ひぼん)なる人のごとくにふるまへる
後(のち)のさびしさは
何(なに)にかたぐへむ

大(おほ)いなる彼の身体(からだ)が
憎(にく)かりき

その前にゆきて物を言ふ時

実務には役に立たざるうた人(ぴと)と
我を見る人に
金借りにけり

遠くより笛の音(ね)きこゆ
うなだれてある故(ゆゑ)やらむ
なみだ流るる

それもよしこれもよしとてある人の
その気がるさを
欲(ほ)しくなりたり

死ぬことを
持薬(ぢやく)をのむがごとくにも我はおもへり
心いためば

路傍(みちばた)に犬ながながと※呻(あくび)しぬ
われも真似(まね)しぬ
うらやましさに

真剣になりて竹もて犬を撃(う)つ
小児(せうに)の顔を
よしと思へり

ダイナモの
重き唸(うな)りのここちよさよ
あはれこのごとく物を言はまし

剽軽(へうきん)の性(さが)なりし友の死顔の
青き疲れが
いまも目にあり

気の変る人に仕(つか)へて
つくづくと
わが世がいやになりにけるかな

龍(りょう)のごとくむなしき空に躍(をど)り出(い)でて
消えゆく煙
見れば飽(あ)かなく

こころよき疲れなるかな
息もつかず
仕事をしたる後(のち)のこの疲れ

空寝入生※呻(そらねいりなまあくび)など
なぜするや
思ふこと人にさとらせぬため

箸止(はしと)めてふっと思ひぬ

やうやくに
世のならはしに慣れにけるかな

朝はやく
婚期を過ぎし妹の
恋文めける文を読めりけり

しっとりと
水を吸ひたる海綿の
重さに似たる心地おぼゆる

死ね死ねと己を怒り
もだしたる
心の底の暗きむなしさ

けものめく顔あり口をあけたてす
とのみ見てゐぬ

人の語るを

親と子と
はなればなれの心もて静かに対(むか)ふ
気まづきや何(な)ぞ

かの船の
かの航海の船客(せんかく)の一人にてありき
死にかねたるは

目の前の菓子皿(くわしざら)などを
かりかりと噛(か)みてみたくなりぬ
もどかしきかな

よく笑ふ若き男の
死にたらば
すこしはこの世さびしくもなれ

何がなしに
息きれるまで駆け出してみたくなりたり
草原などを

あたらしき背広など着て
旅をせむ
しかく今年も思ひ過ぎたる

ことさらに燈火を消して
まぢまぢと思ひてゐしは
わけもなきこと

浅草の凌雲閣のいただきに
腕組みし日の
長き日記かな

尋常のおどけならむや
ナイフ持ち死ぬまねをする
その顔その顔

こそこその話がやがて高くなり
ピストル鳴りて
人生終る

時ありて
子供のやうにたはむれす
恋ある人のなさぬ業かな

とかくして家を出づれば
日光のあたたかさあり
息ふかく吸ふ

つかれたる牛のよだれは

たらたらと
千万年も尽きざるごとし
路傍(みちばた)の切石(きりいし)の上に
腕拱(く)みて
空を見上ぐる男ありたり

何やらむ
穏(おだや)かならぬ目付(めつき)して
鶴嘴(つるはし)を打つ群を見てゐる

心より今日(けふ)は逃げ去れり
病(やまひ)ある獣(けもの)のごとき
不平逃げ去れり

おほどかの心来れり
あるくにも

腹に力のたまるがごとし

ただひとり泣かまほしさに
来て寝たる
宿屋(やどや)の夜具(やぐ)のこころよさかな

友よさは
乞食(こじき)の卑(いや)しさ厭(いと)ふなかれ
餓(う)ゑたる時は我も爾(しか)りき

新しきインクのにほひ
栓抜(せんぬ)けば
餓ゑたる腹に沁(し)むがかなしも

かなしきは
喉(のど)のかわきをこらへつつ
夜寒(よさむ)の夜具にちぢこまる時

一度でも我に頭を下げさせし
人みな死ねと
いのりてしこと

我に似し友の二人(ふたり)よ
一人は死に
一人は牢(ろう)を出(い)でて今病(や)む

あまりある才を抱(いだ)きて
妻のため
おもひわづらふ友をかなしむ

打明けて語りて
何か損(そん)をせしごとく思ひて
友とわかれぬ

どんよりと
くもれる空を見てゐしに
人を殺したくなりにけるかな

人並(ひとなみ)の才(さい)に過ぎざる
わが友の
深き不平もあはれなるかな

誰(たれ)が見てもとりどころなき男来て
威張(ゐば)りて帰りぬ
かなしくもあるか

はたらけど
はたらけど猶(なほ)わが生活(くらし)楽にならざり
ぢっと手を見る

何もかも行末(ゆくすゑ)の事みゆるごとき

このかなしみは
拭(ぬぐ)ひあへずも

とある日に
酒をのみたくてならぬごとく
今日(けふ)われ切(せち)に金(かね)を欲(ほ)りせり

水晶(すゐしやう)の玉をよろこびもてあそぶ
わがこの心
何(なに)の心ぞ

事もなく
且(か)つこころよく肥(こ)えてゆく
わがこのごろの物足らぬかな

大いなる水晶の玉を
ひとつ欲(ほ)し

それにむかひて物を思はむ

うぬ惚(ぼ)るる友に
合槌(あひづち)うちてゐぬ
施与(ほどこし)をするごとき心に

ある朝のかなしき夢のさめぎはに
鼻に入(い)り来(き)し
味噌(みそ)を煮(に)る香(か)よ

こつこつと空地(あきち)に石をきざむ音
耳につき来(き)ぬ
家(いへ)に入(い)るまで

何がなしに
頭(あたま)のなかに崖(がけ)ありて
日毎(ひごと)に土のくづるるごとし

遠方に電話の鈴の鳴るごとく
今日も耳鳴る
かなしき日かな

垢じみし袷の襟よ
かなしくも
ふるさとの胡桃焼くるにほひす

死にたくてならぬ時あり
はばかりに人目を避けて
怖き顔する

一隊の兵を見送りて
かなしかり
何ぞ彼等のうれひ無げなる

邦人（くにびと）の顔たへがたく卑（いや）しげに
目にうつる日なり
家にこもらむ

この次の休日（やすみ）に一日寝てみむと
思ひすごしぬ
三年（みとせ）このかた

或る時のわれのこころを
焼きたての
麺麭（ぱん）に似たりと思ひけるかな

たんたらたらたんたらたらと
雨滴（あまだれ）が
痛むあたまにひびくかなしさ

ある日のこと

室の障子をはりかへぬ
その日はそれにて心なごみき

かうしては居られずと思ひ
立ちにしが
戸外に馬の嘶きしまで

気ぬけして廊下に立ちぬ
あららかに扉を推せしに
すぐ開きしかば

ぢっとして
黒はた赤のインク吸ひ
堅くかわける海綿を見る

誰が見ても
われをなつかしくなるごとき

長き手紙を書きたき夕(ゆふべ)

うすみどり
飲めば身体(からだ)が水のごと透(す)きとほるてふ
薬はなきか

いつも睨(にら)むラムプに飽(あ)きて
三日(みか)ばかり
蝋燭(らふそく)の火にしたしめるかな

人間のつかはぬ言葉
ひょっとして
われのみ知れるごとく思ふ日

あたらしき心もとめて
名も知らぬ
街など今日(けふ)もさまよひて来(き)ぬ

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ
花を買ひ来(き)て
妻(つま)としたしむ

何(なに)すれば
此処(ここ)に我ありや
時にかく打驚(うちおどろ)きて室(へや)を眺むる

人ありて電車のなかに唾(つば)を吐(は)く
それにも
心いたまむとしき

夜明けまであそびてくらす場所が欲(ほ)し
家(いへ)をおもへば
こころ冷(つめ)たし

人みなが家を持つてふかなしみよ
墓に入るごとく
かへりて眠る

何かひとつ不思議を示し
人みなのおどろくひまに
消えむと思ふ

人といふ人のこころに
一人づつ囚人がゐて
うめくかなしさ

叱られて
わっと泣き出す子供心
その心にもなりてみたきかな

盗むてふことさへ悪しと思ひえぬ

心はかなし
かくれ家もなし

放たれし女のごときかなしみを
よわき男の
感ずる日なり

庭石に
はたと時計をなげうてる
昔のわれの怒りいとしも

顔あかめ怒りしことが
あくる日は
さほどにもなきをさびしがるかな

いらだてる心よ汝はかなしかり
いざいざ

すこし※呻(あくび)などせむ

女あり
わがいひつけに背(そむ)かじと心を砕(くだ)く
見ればかなしも

ふがひなき
わが日(ひ)の本(もと)の女等(をんなら)を
秋雨(あきさめ)の夜(よ)にののしりしかな

男とうまれ男と交(まじ)り
負けてをり
かるがゆゑにや秋が身に沁(し)む

わが抱(いだ)く思想はすべて
金(かね)なきに因(いん)するごとし
秋の風吹く

くだらない小説を書きてよろこべる
男憐(あは)れなり
初秋(はつあき)の風

秋の風
今日(けふ)よりは彼(か)のふやけたる男に
口を利(き)かじと思ふ

はても見えぬ
真直(ますぐ)の街をあゆむごとき
こころを今日は持ちえたるかな

何事も思ふことなく
いそがしく
暮らせし一日(ひとひ)を忘れじと思ふ

何事も金金(かねかね)とわらひ
すこし経(へ)て
またも俄(にはか)に不平つのり来(く)

誰(た)そ我(われ)に
ピストルにても撃(う)てよかし
伊藤のごとく死にて見せなむ

やとばかり
桂首相(かつら)に手とられし夢みて覚(さ)めぬ
秋の夜の二時

煙

一

病(やまひ)のごと

思郷(しきやう)のこころ湧(わ)く日なり
目にあをぞらの煙(けむり)かなしも

己(おの)が名をほのかに呼びて
涙せし
十四(じふし)の春にかへる術(すべ)なし

青空に消えゆく煙
さびしくも消えゆく煙
われにし似るか

かの旅の汽車の車掌(しやしやう)が
ゆくりなくも
我が中学の友なりしかな

ほとばしる喞筒(ポンプ)の水の
心地(ここち)よさよ

しばしは若きこころもて見る

師も友も知らで責めにき
謎に似る
わが学業のおこたりの因

教室の窓より遁げて
ただ一人
かの城址に寝に行きしかな

不来方のお城の草に寝ころびて
空に吸はれし
十五の心

かなしみといはばいふべき
物の味
我の嘗めしはあまりに早かり

晴れし空仰(あふ)げばいつも
口笛を吹きたくなりて
吹きてあそびき

夜寝ても口笛吹きぬ
口笛は
十五の我の歌にしありけり

よく叱(しか)る師ありき
髭(ひげ)の似たるより山羊(やぎ)と名づけて
口真似もしき

われと共(とも)に
小鳥に石を投げて遊ぶ
後備大尉(こうびたいゐ)の子もありしかな

城址の
石に腰掛け
禁制の木の実をひとり味ひしこと

その後に我を捨てし友も
あの頃は共に書読み
ともに遊びき

学校の図書庫の裏の秋の草
黄なる花咲きし
今も名知らず

花散れば
先づ人さきに白の服着て家出づる
我にてありしか

今は亡き姉の恋人のおとうとと

なかよくせしを
かなしと思ふ

夏休み果(は)ててそのまま
かへり来(こ)ぬ
若き英語の教師もありき

ストライキ思ひ出(い)でても
今は早(は)や吾が血躍(をど)らず
ひそかに淋(さび)し

盛岡(もりをか)の中学校の
露台(バルコン)の
欄干(てすり)に最一度(もいちど)我を倚(よ)らしめ

神有りと言ひ張る友を
説(と)きふせし

かの路傍の栗の樹の下
西風に
内丸大路の桜の葉
かさこそ散るを踏みてあそびき

そのかみの愛読の書よ
大方は
今は流行らずなりにけるかな

石ひとつ
坂をくだるがごとくにも
我けふの日に到り着きたる

愁ひある少年の眼に羨みき
小鳥の飛ぶを
飛びてうたふを

解剖せし
蚯蚓のいのちもかなしかり
かの校庭の木柵の下

かぎりなき知識の慾に燃ゆる眼を
姉は傷みき
人恋ふるかと

蘇峯の書を我に薦めし友早く
校を退きぬ
まづしさのため

おどけたる手つきをかしと
我のみはいつも笑ひき
博学の師を

自(し)が才(さい)に身をあやまちし人のこと
かたりきかせし
師もありしかな

そのかみの学校一のなまけ者
今は真面目(まじめ)に
はたらきて居(を)り

田舎(ゐなか)めく旅の姿を
三日(みか)ばかり都に曝(さら)し
かへる友かな

茨島(ばらじま)の松の並木の街道を
われと行きし少女(をとめ)
才(さい)をたのみき

眼を病みて黒き眼鏡(めがね)をかけし頃

その頃よ
一人泣くをおぼえし

わがこころ
けふもひそかに泣かむとす
友みな己(おの)が道をあゆめり

先(さき)んじて恋のあまさと
かなしさを知りし我なり
先んじて老(お)ゆ

興来(きょうきた)れば
友なみだ垂(た)れ手を揮(ふ)りて
酔漢(よひどれ)のごとくなりて語りき

人ごみの中をわけ来(く)る
わが友の

むかしながらの太き杖かな

見よげなる年賀の文を書く人と
おもひ過ぎにき
三年ばかりは

夢さめてふっと悲しむ
わが眠り
昔のごとく安からぬかな

そのむかし秀才の名の高かりし
友牢にあり
秋のかぜ吹く

近眼にて
おどけし歌をよみ出でし
茂雄の恋もかなしかりしか

わが妻のむかしの願ひ
音楽のことにかかりき
今はうたはず

友はみな或日(あるひ)四方(しほう)に散り行(ゆ)きぬ
その後(のち)八年(やとせ)
名挙(なあ)げしもなし

わが恋を
はじめて友にうち明けし夜(よる)のことなど
思ひ出(い)づる日

糸切れし紙鳶(たこ)のごとくに
若き日の心かろくも
とびさりしかな

二

ふるさとの訛(なまり)なつかし
停車場(ていしやば)の人ごみの中に
そを聴(き)きにゆく

やまひある獣(けもの)のごとき
わがこころ
ふるさとのこと聞けばおとなし

ふと思ふ
ふるさとにゐて日毎聴(ひごとき)きし雀(すずめ)の鳴くを
三年(みとせ)聴かざり

亡(な)くなれる師がその昔
たまひたる
地理の本など取りいでて見る

その昔
小学校の柾屋根(まさやね)に我が投げし鞠(まり)
いかにかなりけむ

ふるさとの
かの路傍(みちばた)のすて石よ
今年も草に埋(うづ)もれしらむ

わかれをれば妹(いもと)いとしも
赤き緒(を)の
下駄(げた)など欲(ほ)しとわめく子なりし

二日(ふつか)前に山の絵(ゑ)見しが
今朝(けさ)になりて
にはかに恋しふるさとの山

飴売のチャルメラ聴けば
うしなひし
をさなき心ひろへるごとし

このごろは
母も時時ふるさとのことを言ひ出づ
秋に入れるなり

それとなく
郷里のことなど語り出でて
秋の夜に焼く餅のにほひかな

かにかくに渋民村は恋しかり
おもひでの山
おもひでの川

田も畑も売りて酒のみ

ほろびゆくふるさと人(ぴと)に
心寄する日

あはれかの我の教へし
子等(こら)もまた
やがてふるさとを棄(す)てて出(い)づるらむ

ふるさとを出(い)で来(き)し子等の
相会(あいあ)ひて
よろこぶにまさるかなしみはなし

石をもて追はるるごとく
ふるさとを出(い)でしかなしみ
消ゆる時なし

やはらかに柳あをめる
北上(きたかみ)の岸辺(きしべ)目に見ゆ

泣けとごとくに

ふるさとの
村医(そんい)の妻のつつましき櫛巻(くしまき)などもなつかしきかな

かの村の登記所(とうきしょ)に来て
肺病(はいや)みて
間もなく死にし男もありき

小学の首席を我と争(あらそ)ひし
友のいとなむ
木賃宿(きちんやど)かな

千代治等(ちよぢら)も長(ちやう)じて恋し
子を挙(あ)げぬ
わが旅にしてなせしごとくに

ある年の盆の祭に
衣貸さむ踊れと言ひし
女を思ふ

うすのろの兄と
不具の父もてる三太はかなし
夜も書読む

我と共に
栗毛の仔馬走らせし
母の無き子の盗癖かな

大形の被布の模様の赤き花
今も目に見ゆ
六歳の日の恋

その名さへ忘られし頃
飄然(へうぜん)とふるさとに来て
咳(せき)せし男

意地悪(いぢわる)の大工(だいく)の子どもかなしかり
戦(いくさ)に出(い)でしが
生きてかへらず

肺を病む
極道地主(ごくだうぢぬし)の総領(そうりやう)の
よめとりの日の春の雷(らい)かな

宗次郎(そうじろ)に
おかねが泣きて口説(くど)き居(を)り
大根(だいこん)の花白きゆふぐれ

小心(せうしん)の役場の書記の

気の狂れし噂に立てる
ふるさとの秋

わが従兄
野山の猟に飽きし後
酒のみ家売り病みて死にしかな

我ゆきて手をとれば
泣きてしづまりき
酔ひて荒れしそのかみの友

酒のめば
刀をぬきて妻を逐ふ教師もありき
村を遂はれき

年ごとに肺病やみの殖えてゆく
村に迎へし

若き医者かな

ほたる狩(がり)
川にゆかむといふ我を
山路(やまぢ)にさそふ人にてありき

馬鈴薯(ばれいしよ)のうす紫の花に降(ふ)る
雨を思へり
都(みやこ)の雨に

あはれ我がノスタルジヤは
金(きん)のごと
心に照れり清くしみらに

友として遊ぶものなき
性悪(しやうわる)の巡査の子等(こら)も
あはれなりけり

閑古鳥（かんこどり）
鳴く日となれば起（おこ）るてふ
友のやまひのいかになりけむ

わが思ふこと
おほかたは正（ただ）しかり
ふるさとのたより着（つ）ける朝（あした）は

今日聞けば
かの幸（さち）うすきやもめ人（びと）
きたなき恋に身を入（い）るるてふ

わがために
なやめる魂（たま）をしづめよと
讃美歌うたふ人ありしかな

あはれかの男のごときたましひよ
今は何処(いづこ)に
何を思ふや

わが庭の白き躑躅(つつじ)を
薄月(うすづき)の夜(よ)に
折(を)りゆきしことな忘れそ

わが村に
初めてイエス・クリストの道を説(と)きたる
若き女かな

霧ふかき好摩(かうま)の原(はら)の
停車場の
朝の虫こそすずろなりけれ

汽車の窓

はるかに北にふるさとの山見え来(く)れば
襟(えり)を正(ただ)すも

ふるさとの土をわが踏めば
何がなしに足軽(かろ)くなり
心重(おも)れり

ふるさとに入(い)りて先(ま)づ心傷(いた)むかな
道広くなり
橋もあたらし

見もしらぬ女教師(をんなけうし)が
そのかみの
わが学舎(まなびや)の窓に立てるかな

かの家(いへ)のかの窓にこそ
春の夜(よ)を

秀子(ひでこ)とともに蛙聴(かはづき)けれ
そのかみの神童(しんどう)の名の
かなしさよ
ふるさとに来て泣くはそのこと

ふるさとの停車場路(ていしやばみち)の
川ばたの
胡桃(くるみ)の下に小石拾(ひろ)へり

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

秋風のこころよさに

ふるさとの空遠(とほ)みかも

高き屋にひとりのぼりて
愁ひて下る

皎として玉をあざむく小人も
秋来といふに
物を思へり

かなしきは
秋風ぞかし
稀にのみ湧きし涙の繁に流るる

青に透く
かなしみの玉に枕して
松のひびきを夜もすがら聴く

神寂びし七山の杉
火のごとく染めて日入りぬ

静かなるかな

そを読めば
愁(うれ)ひ知るといふ書焚(ふみた)ける
いにしへ人(ぴと)の心よろしも

ものなべてうらはかなげに
暮れゆきぬ
とりあつめたる悲しみの日は

水漂(みづたまり)
暮れゆく空とくれなゐの紐(ひも)を浮べぬ
秋雨(あきさめ)の後(のち)

秋立つは水にかも似る
洗(あら)はれて
思ひことごと新しくなる

愁ひ来て
丘にのぼれば
名も知らぬ鳥啄め り赤き茨の実

秋の辻
四すぢの路の三すぢへと吹きゆく風の
あと見えずかも

秋の声まづいち早く耳に入る
かかる性持つ
かなしむべかり

目になれし山にはあれど
秋来れば
神や住まむとかしこみて見る

わが為さむこと世に尽きて
長き日を
かくしもあはれ物を思ふか

さらさらと雨落ち来り
庭の面の濡れゆくを見て
涙わすれぬ

ふるさとの寺の御廊に
踏みにける
小櫛の蝶を夢にみしかな

こころみに
いとけなき日の我となり
物言ひてみむ人あれと思ふ
はたはたと黍の葉鳴れる

ふるさとの軒端(のきば)なつかし
秋風吹けば

摩(す)れあへる肩のひまより
はつかにも見きといふさへ
日記(にき)に残れり

風流男(みやびを)は今も昔も
泡雪(あわゆき)の
玉手(たまで)さし捲(ま)く夜にし老(お)ゆらし

かりそめに忘れても見まし
石だたみ
春生(お)ふる草に埋(うも)るるがごと

その昔揺籃(ゆりかご)に寝て
あまたたび夢にみし人か

切(せち)になつかし

神無月(かみなづき)
岩手(いはて)の山の
初雪の眉(まゆ)にせまりし朝を思ひぬ

ひでり雨さらさら落ちて
前栽(せんざい)の
萩(はぎ)のすこしく乱(みだ)れたるかな

秋の空廓寥(くわくれう)として影もなし
あまりにさびし
烏(からす)など飛べ

雨後(うご)の月
ほどよく濡(ぬ)れし屋根瓦(やねがはら)の
そのところどころ光るかなしさ

われ饑(う)ゑてある日に
細き尾を掉(ふ)りて
饑ゑて我を見る犬の面(つら)よし

いつしかに
泣くといふこと忘れたる
我泣かしむる人のあらじか

汪然(わうぜん)として
ああ酒のかなしみぞ我に来(きた)れる
立ちて舞(ま)ひなむ

※嗚呼(いとど)く
そのかたはらの石に踞(きよ)し
泣き笑ひしてひとり物言ふ

力なく病みし頃より
口すこし開きて眠るが
癖となりにき

人ひとり得るに過ぎざる事をもて
大願とせし
若きあやまち

物怨ずる
そのやはらかき上目をば
愛づとことさらつれなくせむや

かくばかり熱き涙は
初恋の日にもありきと
泣く日またなし

長く長く忘れし友に

会ふごとき
よろこびをもて水の音聴く

秋の夜の
鋼鉄の色の大空に
火を噴く山もあれなど思ふ

岩手山
秋はふもとの三方の
野に満つる虫を何と聴くらむ

父のごと秋はいかめし
母のごと秋はなつかし
家持たぬ児に

秋来れば
恋ふる心のいとまなさよ

夜もい寝がてに雁多く聴く
長月も半ばになりぬ
いつまでか
かくも幼く打出でずあらむ

思ふてふこと言はぬ人の
おくり来し
忘れな草もいちじろかりし

秋の雨に逆反りやすき弓のごと
このごろ
君のしたしまぬかな

松の風夜昼ひびきぬ
人訪はぬ山の祠の
石馬の耳に

ほのかなる朽木(くちき)の香(か)り
そがなかの蕈(たけ)の香りに
秋やや深し

時雨(しぐれ)降るごとき音して
木伝(こづた)ひぬ
人によく似し森の猿(さる)ども

森の奥
遠きひびきす
木(き)のうろに臼(うす)ひく侏儒(しゅじゅ)の国にかも来(き)し

世のはじめ
まづ森ありて
半神(はんしん)の人そが中に火や守りけむ

はてもなく砂うちつづく
戈壁（ゴビ）の野に住みたまふ神は
秋の神かも

あめつちに
わが悲しみと月光（げつくわう）と
あまねき秋の夜（よ）となれりけり

うらがなしき
夜（よる）の物の音洩（ねも）れ来（く）るを
拾（ひろ）ふがごとくさまよひ行（ゆ）きぬ

旅の子の
ふるさとに来（き）て眠るがに
げに静かにも冬の来（き）しかな

忘れがたき人人

一

潮(しほ)かをる北の浜辺(はまべ)の
砂山のかの浜薔薇(はまなす)よ
今年も咲けるや

たのみつる年の若さを数(かぞ)へみて
指を見つめて
旅がいやになりき

三度(みたび)ほど
汽車の窓よりながめたる町の名なども
したしかりけり

函館(はこだて)の床屋(とこや)の弟子(でし)を
おもひ出(い)でぬ

耳剃(そ)らせるがこころよかりし
わがあとを追ひ来(き)て
知れる人もなき
辺土(へんど)に住みし母と妻かな

船に酔(よ)ひてやさしくなれる
いもうとの眼見(めみ)ゆ
津軽(つがる)の海を思へば

目を閉(と)ぢて
傷心(しやうしん)の句を誦(ず)してゐし
友の手紙のおどけ悲しも

をさなき時
橋の欄干(らんかん)に糞塗(くそぬ)りし
話も友はかなしみてしき

おそらくは生涯(しやうがい)妻をむかへじと
わらひし友よ
今もめとらず

あはれかの
眼鏡(めがね)の縁(ふち)をさびしげに光らせてゐし
女教師よ

友われに飯(めし)を与へき
その友に背(そむ)きし我の
性(さが)のかなしさ

函館(はこだて)の青柳町(あをやぎちやう)こそかなしけれ
友の恋歌(こひうた)
矢ぐるまの花

ふるさとの
麦のかをりを懐(なつ)かしむ
女の眉(まゆ)にこころひかれき

あたらしき洋書の紙の
香(か)をかぎて
一途(いちづ)に金(かね)を欲(ほ)しと思ひしが

しらなみの寄せて騒(さわ)げる
函館の大森浜(おほもりはま)に
思ひしことども

朝な朝な
支那(しな)の俗歌(ぞくか)をうたひ出(い)づる
まくら時計を愛(め)でしかなしみ

漂泊(へうはく)の愁(うれ)ひを叙(じょ)して成(な)らざりし

草稿の字の
読みがたさかな

いくたびか死なむとしては
死なざりし
わが来しかたのをかしく悲し

函館の臥牛の山の半腹の
碑の漢詩も
なかば忘れぬ

むやむやと
口の中にてたふとげの事を呟く
乞食もありき

とるに足らぬ男と思へと言ふごとく
山に入りにき

神のごとき友

巻煙草口にくはへて
浪あらき
磯の夜霧に立ちし女よ

演習のひまにわざわざ
汽車に乗りて
訪ひ来し友とのめる酒かな

大川の水の面を見るごとに
郁雨よ
君のなやみを思ふ

智慧とその深き慈悲とを
もちあぐみ
為すこともなく友は遊べり

こころざし得(え)ぬ人人の
あつまりて酒のむ場所が
我が家なりしかな

かなしめば高く笑ひき
酒をもて
悶(もん)を解(げ)すといふ年上の友

若くして
数人(すにん)の父となりし友
子なきがごとく酔(ゑ)へばうたひき

さりげなき高き笑ひが
酒とともに
我が腸(はらわた)に沁(し)みにけらしな

※呷嚙(あくびか)み
夜汽車の窓に別れたる
別れが今は物足(ものた)らぬかな

雨に濡れし夜汽車の窓に
映(うつ)りたる
山間(やまあひ)の町のともしびの色

雨つよく降る夜の汽車の
たえまなく雫(しづく)流るる
窓硝子(まどガラス)かな

真夜中の
倶知安駅(くちあんえき)に下(お)りゆきし
女の鬢(びん)の古き痍(きず)あと

札幌(さつぽろ)に

かの秋われの持てゆきし
しかして今も持てるかなしみ

アカシヤの街※(なみき)にポプラに
秋の風
吹くがかなしと日記(にき)に残れり

しんとして幅広き街(まち)の
秋の夜の
玉蜀黍(たうもろこし)の焼くるにほひよ

わが宿の姉と妹(いもと)のいさかひに
初夜(しよや)過ぎゆきし
札幌の雨

石狩(いしかり)の美国(びくに)といへる停車場の
柵(さく)に乾(ほ)してありし

赤き布片(きれ)かな

かなしきは小樽(をたる)の町よ
歌ふことなき人人の
声の荒さよ

泣くがごと首ふるはせて
手の相(さう)を見せよといひし
易者(えきしや)もありき

いささかの銭(ぜに)借りてゆきし
わが友の
後姿(うしろすがた)の肩(かた)の雪かな

世わたりの拙(つたな)きことを
ひそかにも
誇(ほこ)りとしたる我にやはあらぬ

汝(な)が痩(や)せしからだはすべて
謀叛気(むほんぎ)のかたまりなりと
いはれてしこと

かの年のかの新聞の
初雪の記事を書きしは
我なりしかな

椅子(いす)をもて我を撃(う)たむと身構(みがま)へし
かの友の酔(ゑ)ひも
今は醒(さ)めつらむ

負けたるも我にてありき
あらそひの因(もと)も我なりしと
今は思へり

殴らむといふに
殴れとつめよせし
昔の我のいとほしきかな

汝三度
この咽喉に剣を擬したりと
彼告別の辞に言へりけり

あらそひて
いたく憎みて別れたる
友をなつかしく思ふ日も来ぬ

あはれかの眉の秀でし少年よ
弟と呼べば
はつかに笑みしが

わが妻に着物縫はせし友ありし

冬早く来る
植民地かな

平手もて
吹雪にぬれし顔を拭く
友共産を主義とせりけり

酒のめば鬼のごとくに青かりし
大いなる顔よ
かなしき顔よ

樺太に入りて
新しき宗教を創めむといふ
友なりしかな

治まれる世の事無さに
飽きたりといひし頃こそ

かなしかりけれ

共同の薬屋開き
儲(まう)けむといふ友なりき
詐欺(さぎ)せしといふ

あをじろき頬(ほほ)に涙を光らせて
死をば語りき
若き商人(あきびと)

子を負(お)ひて
雪の吹き入(い)る停車場に
われ見送りし妻の眉(まゆ)かな

敵として憎みし友と
やや長く手をば握(にぎ)りき
わかれといふに

ゆるぎ出づる汽車の窓より
人先に顔を引きしも
負けざらむため

みぞれ降る
石狩の野の汽車に読みし
ツルゲエネフの物語かな

わが去れる後の噂を
おもひやる旅出はかなし
死ににゆくごと

わかれ来てふと瞬けば
ゆくりなく
つめたきものの頬をつたへり

忘れ来し煙草を思ふ
ゆけどゆけど
山なほ遠き雪の野の汽車

うす紅く雪に流れて
入日影
曠野の汽車の窓を照せり

腹すこし痛み出でしを
しのびつつ
長路の汽車にのむ煙草かな

乗合の砲兵士官の
剣の鞘
がちやりと鳴るに思ひやぶれき

名のみ知りて縁もゆかりもなき土地の

宿屋安けし
我が家のごと

伴なりしかの代議士の
口あける青き寐顔を
かなしと思ひき

今夜こそ思ふ存分泣いてみむと
泊りし宿屋の
茶のぬるさかな

水蒸気
列車の窓に花のごと凍てしを染むる
あかつきの色

ごおと鳴る凩のあと
乾きたる雪舞ひ立ちて

林を包(つつ)めり

空知川雪(そらちがは)に埋(うも)れて
鳥も見えず
岸辺(きしべ)の林に人ひとりゐき

寂寞(せきばく)を敵とし友とし
雪のなかに
長き一生を送る人もあり

いたく汽車に疲れて猶(なほ)も
きれぎれに思ふは
我のいとしさなりき

うたふごと駅の名呼びし
柔和(にうわ)なる
若き駅夫(えきふ)の眼をも忘れず

雪のなか
処処(しょしょ)に屋根見えて
煙突(えんとつ)の煙(けむり)うすくも空にまよへり

遠くより
笛(ふえ)ながながとひびかせて
汽車今とある森林に入(い)る

何事も思ふことなく
日一日(ひいちにち)
汽車のひびきに心まかせぬ

さいはての駅に下(お)り立ち
雪あかり
さびしき町にあゆみ入(い)りにき

しらしらと氷かがやき
千鳥なく
釧路(くしろ)の海の冬の月かな

こほりたるインクの罎(びん)を
火に翳(かざ)し
涙ながれぬともしびの下(もと)

顔とこゑ
それのみ昔に変らざる友にも会ひき
国の果(はて)にて

あはれかの国のはてにて
酒のみき
かなしみの滓(かす)を啜(すす)るごとくに

酒のめば悲しみ一時に湧(わ)き来(く)るを

寐(ね)て夢みぬを
うれしとはせし

出(だ)しぬけの女の笑ひ
身に沁(し)みき
厨(くりや)に酒の凍(こほ)る真夜中

わが酔(ゑ)ひに心いためて
うたはざる女ありしが
いかになれるや

小奴(こやつこ)といひし女の
やはらかき
耳朶(みみたぼ)なども忘れがたかり

よりそひて
深夜(しんや)の雪の中に立つ

女の右手(めて)のあたたかさかな
死にたくはないかと言へば
これ見よと
咽喉(のんど)の痍(きず)を見せし女かな

芸事(げいごと)も顔も
かれより優(すぐ)れたる
女あしざまに我を言へりとか

舞(ま)へといへば立ちて舞ひにき
おのづから
悪酒(あくしゅ)の酔(ゑ)ひにたふるるまでも

死ぬばかり我が酔(ゑ)ふをまちて
いろいろの
かなしきことを囁(ささや)きし人

いかにせしと言へば
あをじろき酔ひざめの
面に強ひて笑みをつくりき

かなしきは
かの白玉のごとくなる腕に残せし
キスの痕かな

酔ひてわがうつむく時も
水ほしと眼ひらく時も
呼びし名なりけり

火をしたふ虫のごとくに
ともしびの明るき家に
かよひ慣れにき

きしきしと寒さに踏めば板軋(いたきし)む
かへりの廊下の
不意のくちづけ

その膝(ひざ)に枕(まくら)しつつも
我がこころ
思ひしはみな我のことなり

さらさらと氷の屑(くづ)が
波に鳴る
磯の月夜のゆきかへりかな

死にしとかこのごろ聞きぬ
恋がたき
才(さい)あまりある男なりしが

十年(とせ)まへに作りしといふ漢詩(からうた)を

酔(ゑ)へば唱(とな)へき
旅に老(お)いし友

吸ふごとに
鼻がぴたりと凍(こほ)りつく
寒き空気を吸ひたくなりぬ

波もなき二月の湾(わん)に
白塗(しろぬり)の
外国船が低く浮かべり

三味線(さみせん)の絃(いと)のきれしを
火事のごと騒ぐ子ありき
大雪の夜(よ)に

神のごと
遠く姿をあらはせる

阿寒の山の雪のあけぼの
郷里にゐて
身投げせしことありといふ
女の三味にうたへるゆふべ

葡萄色の
古き手帳にのこりたる
かの会合の時と処かな

よごれたる足袋穿く時の
気味わるき思ひに似たる
思出もあり

わが室に女泣きしを
小説のなかの事かと
おもひ出づる日

浪淘沙（らうたうさ）

ながくも声をふるはせて
うたふがごとき旅なりしかな

二

いつなりけむ
夢にふと聴（き）きてうれしかりし
その声もあはれ長く聴かざり

頬（ほ）の寒き
流離（りうり）の旅の人として
路問（みちと）ふほどのこと言ひしのみ

さりげなく言ひし言葉は
さりげなく君も聴きつらむ

それだけのこと

ひややかに清き大理石（なめいし）に
春の日の静かに照るは
かかる思ひならむ

世の中の明るさのみを吸ふごとき
黒き瞳（ひとみ）の
今も目にあり

かの時に言ひそびれたる
大切の言葉は今も
胸にのこれど

真白（ましろ）なるラムプの笠（かさ）の
瑕（きず）のごと
流離の記憶消しがたきかな

函館(はこだて)のかの焼跡(やけあと)を去りし夜(よ)の
こころ残りを
今も残しつ

人がいふ
鬢(びん)のほつれのめでたさを
物書く時の君に見たりし

馬鈴薯(ばれいしょ)の花咲く頃と
なれりけり
君もこの花を好きたまふらむ

山の子の
山を思ふがごとくにも
かなしき時は君を思へり

忘れをれば
ひょっとした事が思ひ出の種にまたなる
忘れかねつも

病むと聞き
癒えしと聞きて
四百里のこなたに我はうつつなかりし

君に似し姿を街に見る時の
こころ躍りを
あはれと思へ

かの声を最一度聴かば
すっきりと
胸や霽れむと今朝も思へる

いそがしき生活のなかの

時折(ときおり)のこの物おもひ
誰(たれ)のためぞも

しみじみと
物うち語る友もあれ
君のことなど語り出(い)でなむ

死ぬまでに一度会はむと
言ひやらば
君もかすかにうなづくらむか

時として
君を思へば
安かりし心にはかに騒ぐかなしさ

わかれ来(き)て年(とし)を重ねて
年(とし)ごとに恋しくなれる

君にしあるかな
石狩(いしかり)の都(みやこ)の外の
君が家
林檎(りんご)の花の散りてやあらむ

長き文(ふみ)
三年(みとせ)のうちに三度(みたび)来ぬ
我の書きしは四度(よたび)にかあらむ

手套を脱ぐ時

手套(てぶくろ)を脱(ぬ)ぐ手ふと休(や)む
何やらむ
こころかすめし思ひ出のあり
いつしかに

情(じやう)をいつはること知りぬ
髭(ひげ)を立てしもその頃なりけむ

朝の湯の
湯槽(ゆぶね)のふちにうなじ載(の)せ
ゆるく息(いき)する物思ひかな

夏来(く)れば
うがひ薬の
病(やまひ)ある歯に沁(し)む朝のうれしかりけり

つくづくと手をながめつつ
おもひ出(い)でぬ
キスが上手(じやうず)の女なりしが

さびしきは
色にしたしまぬ目のゆゑと

赤き花など買はせけるかな

新しき本を買ひ来て読む夜半(よは)の
そのたのしさも
長くわすれぬ

旅七日(たびなのか)
かへり来(き)ぬれば
わが窓の赤きインクの染(し)みもなつかし

古文書(こもんじょ)のなかに見いでし
よごれたる
吸取紙(すひとりがみ)をなつかしむかな

手にためし雪の融(と)くるが
ここちよく
わが寐飽(ねあ)きたる心には沁(し)む

薄れゆく障子(しやうじ)の日影(ひかげ)
そを見つつ
こころいつしか暗くなりゆく

ひやひやと
夜は薬の香(か)のにほふ
医者が住みたるあとの家(いへ)かな

窓硝子(まどガラス)
塵(ちり)と雨とに曇(くも)りたる窓硝子にも
かなしみはあり

六年(むとせ)ほど日毎日毎(ひごとひごと)にかぶりたる
古き帽子も
棄(す)てられぬかな

こころよく
春のねむりをむさぼれる
目にやはらかき庭の草かな

赤煉瓦遠くつづける高塀(あかれんぐわ)(たかべい)の
むらさきに見えて
春の日ながし

春の雪
銀座の裏の三階の煉瓦造(づくり)に
やはらかに降る

よごれたる煉瓦の壁に
降りて融(と)け降りては融くる
春の雪かな

目を病(や)める

若き女の倚(よ)りかかる
窓にしめやかに春の雨降る

あたらしき木のかをりなど
ただよへる
新開町(しんかいまち)の春の静けさ

春の街(まち)
見よげに書ける女名(をんな)の
門札(かどふだ)などを読みありくかな

そことなく
蜜柑(みかん)の皮の焼くるごときにほひ残りて
夕(ゆふべ)となりぬ

にぎはしき若き女の集会(あつまり)の
こゑ聴(き)き倦(う)みて

さびしくなりたり

何処(どこ)やらに
若き女の死ぬごとき悩(なや)ましさあり
春の霙(みぞれ)降る

コニャックの酔(ゑ)ひのあとなる
やはらかき
このかなしみのすずろなるかな

白き皿(さら)
拭(ふ)きては棚(たな)に重(かさ)ねゐる
酒場の隅(すみ)のかなしき女

乾きたる冬の大路(おほぢ)の
何処(いづく)やらむ
石炭酸(せきたんさん)のにほひそめり

赤赤(あかあか)と入日(いりひ)うつれる
河ばたの酒場の窓の
白き顔かな

新しきサラドの皿(さら)の
酢(す)のかをり
こころに沁(し)みてかなしき夕(ゆふべ)

空色(そらいろ)の罎(びん)より
山羊(やぎ)の乳をつぐ
手のふるひなどいとしかりけり

すがた見の
息(いき)のくもりに消されたる
酔(ゑ)ひうるみの眸(まみ)のかなしさ

ひとしきり静かになれる
ゆふぐれの
厨(くりや)にのこるハムのにほひかな

ひややかに罎(びん)のならべる棚(たな)の前
歯(は)せせる女を
かなしとも見き

やや長きキスを交(かは)して別れ来(き)し
深夜の街の
遠き火事かな

病院の窓のゆふべの
ほの白(じろ)き顔にありたる
淡(あは)き見覚(みおぼ)え

何時(いつ)なりしか

かの大川の遊船に
舞ひし女をおもひ出にけり

用もなき文など長く書きさして
ふと人こひし
街に出てゆく

しめらへる煙草を吸へば
おほよその
わが思ふことも軽くしめれり

するどくも
夏の来るを感じつつ
雨後の小庭の土の香を嗅ぐ

すずしげに飾り立てたる
硝子屋の前にながめし

夏の夜の月

君来るといふに夙く起き
白シャツの
袖のよごれを気にする日かな

おちつかぬ我が弟の
このごろの
眼のうるみなどかなしかりけり

どこやらに杭打つ音し
大桶をころがす音し
雪ふりいでぬ

人気なき夜の事務室に
けたたましく
電話の鈴の鳴りて止みたり

目さまして
ややありて耳に入り来る
真夜中すぎの話声かな

見てをれば時計とまれり
吸はるるごと
心はまたもさびしさに行く

朝朝の
うがひの料の水薬の
罎がつめたき秋となりにけり

夷かに麦の青める
丘の根の
小径に赤き小櫛ひろへり

裏山の杉生(すぎふ)のなかに
斑(まだら)なる日影(ひかげ)這(は)ひ入(い)る
秋のひるすぎ

港町
とろろと鳴きて輪を描く鳶(とび)を圧(あつ)せる
潮(しほ)ぐもりかな

小春(こはるび)日の曇硝子(くもりガラス)にうつりたる
鳥影(とりかげ)を見て
すずろに思ふ

ひとならび泳げるごとき
家家(いへいへ)の高低(たかひく)の軒(のき)に
冬の日の舞ふ

京橋の滝山町(たきやまちやう)の

新聞社
灯ともる頃のいそがしさかな

よく怒る人にてありしわが父の
日ごろ怒らず
怒れと思ふ

あさ風が電車のなかに吹き入れし
柳のひと葉
手にとりて見る

ゆゑもなく海が見たくて
海に来ぬ
こころ傷みてたへがたき日に

たひらなる海につかれて
そむけたる

目をかきみだす赤き帯かな

今日逢ひし町の女の
どれもどれも
恋にやぶれて帰るごとき日

汽車の旅
とある野中の停車場の
夏草の香のなつかしかりき

朝まだき
やっと間に合ひし初秋の旅出の汽車の
堅き麺麭かな

かの旅の夜汽車の窓に
おもひたる
我がゆくすゑのかなしかりしかな

ふと見れば
とある林の停車場の時計とまれり
雨の夜の汽車

わかれ来て
燈火小暗き夜の汽車の窓に弄ぶ
青き林檎よ

いつも来る
この酒肆のかなしさよ
ゆふ日赤赤と酒に射し入る

白き蓮沼に咲くごとく
かなしみが
酔ひのあひだにはっきりと浮く

壁(かべ)ごしに
若き女の泣くをきく
旅の宿屋の秋の蚊帳(かや)かな

取りいでし去年(こぞ)の袷(あはせ)の
なつかしきにほひ身に沁(し)む
初秋(はつあき)の朝

気にしたる左の膝(ひざ)の痛みなど
いつか癒(なほ)りて
秋の風吹く

売り売りて
手垢(てあか)きたなきドイツ語の辞書のみ残る
夏の末かな

ゆゑもなく憎(にく)みし友と

いつしかに親しくなりて
秋の暮れゆく

赤紙(あかがみ)の表紙手擦(てず)れし
国禁(こくきん)の
書(ふみ)を行李(かうり)の底にさがす日

売ることを差し止(と)められし
本の著者に
路(みち)にて会へる秋の朝かな

今日よりは
我も酒など呷(あふ)らむと思へる日より
秋の風吹く

大海(だいかい)の
その片隅(かたすみ)につらなれる島島(しまじま)の上に

秋の風吹く
うるみたる目と
目の下の黒子のみ
いつも目につく友の妻かな

いつ見ても
毛糸の玉をころがして
鞠を編む女なりしが

葡萄色の
長椅子の上に眠りたる猫ほの白き
秋のゆふぐれ

ほそぼそと
其処ら此処らに虫の鳴く
昼の野に来て読む手紙かな

夜(よる)おそく戸を繰(く)りをれば
白きもの庭を走れり
犬にやあらむ

夜の二時の窓の硝子(ガラス)を
うす紅(あか)く
染めて音なき火事の色かな

あはれなる恋かなと
ひとり呟(つぶや)きて
夜半(よは)の火桶(ひをけ)に炭添(すみそ)へにけり

真白(ましろ)なるラムプの笠(かさ)に
手をあてて
寒き夜にする物思ひかな

水のごと
身体をひたすかなしみに
葱の香などのまじれる夕

時ありて
猫のまねなどして笑ふ
三十路の友のひとり住みかな

気弱なる斥候のごとく
おそれつつ
深夜の街を一人散歩す

皮膚がみな耳にてありき
しんとして眠れる街の
重き靴音

夜おそく停車場に入り

立ち坐(すわ)り
やがて出(い)でゆきぬ帽(ぼう)なき男

気がつけば
しっとりと夜霧下(お)りて居(を)り
ながくも街をさまよへるかな

若(も)しあらば煙草(たばこ)恵(めぐ)めと
寄(く)りて来る
あとなし人(ひと)と深夜に語る

曠野(あらの)より帰るごとくに
帰り来(き)ぬ
東京の夜(よ)をひとりあゆみて

銀行の窓の下なる
舗石(しきいし)の霜(しも)にこぼれし

青インクかな

ちょんちょんと
とある小藪(こやぶ)に頬白(ほほじろ)の遊ぶを眺む
雪の野(や)の路(みち)

十月の朝の空気に
あたらしく
息吸(す)ひそめし赤坊(あかんぼ)のあり

十月の産病院の
しめりたる
長き廊下のゆきかへりかな

むらさきの袖垂(そで)れて
空を見上げゐる支那(しな)人ありき
公園の午後

孩児(をさなご)の手ざはりのごとき
思ひあり
公園に来てひとり歩(あゆ)めば

ひさしぶりに公園に来て
友に会ひ
堅(かた)く手握り口疾(くちと)に語る

公園の木(こ)の間(ま)に
小鳥あそべるを
ながめてしばし憩(いこ)ひけるかな

晴れし日の公園に来て
あゆみつつ
わがこのごろの衰(おとろ)へを知る

思出のかのキスかとも
おどろきぬ
プラタヌの葉の散りて触(ふ)れしを

公園の隅(すみ)のベンチに
二度ばかり見かけし男
このごろ見えず

公園のかなしみよ
君の嫁(とつ)ぎてより
すでに七月(ななつき)来しこともなし

公園のとある木蔭(こかげ)の捨椅子(すていす)に
思ひあまりて
身をば寄せたる

忘られぬ顔なりしかな

今日街(まち)に
捕吏(ほり)にひかれて笑(ゑ)める男は

マチ擦(す)れば
二尺ばかりの明るさの
中をよぎれる白き蛾(が)のあり

目をとぢて
口笛かすかに吹きてみぬ
寐(ね)られぬ夜の窓にもたれて

わが友は
今日も母なき子を負ひて
かの城址(しろあと)にさまよへるかな

夜(よる)おそく
つとめ先よりかへり来(き)て

今死にしてふ児(こ)を抱(だ)けるかな

二三(ふたみ)こゑ
いまはのきはに微(かす)かにも泣きしといふに
なみだ誘(さそ)はる

真白(ましろ)なる大根の根の肥(こ)ゆる頃
うまれて
やがて死にし児(こ)のあり

おそ秋の空気を
三尺四方(さんじゃくしほう)ばかり
吸ひてわが児の死にゆきしかな

死にし児の
胸に注射の針を刺す
医者の手もとにあつまる心

底知れぬ謎に対ひてあるごとし
死児のひたひに
またも手をやる

かなしみのつよくいたらぬ
さびしさよ
わが児のからだ冷えてゆけども

かなしくも
夜明くるまでは残りゐぬ
息きれし児の肌のぬくもり

青空文庫情報

底本：「日本文学全集12　国木田独歩　石川啄木集」集英社
　1967（昭和42）年9月12日初版発行
　1972（昭和47）年9月10日9版発行
底本の親本：「一握の砂」東雲堂書店
　1910（明治43）年12月1日刊行
※冒頭の献辞と自序は、「啄木全集　第一巻」筑摩書房、1970（昭和45）年5月20日初版第4刷発行から、補いました。
※底本巻末の小田切進による注解は省略しました。
入力：j.utiyama
校正：浜野智
1998年8月11日公開
2017年10月30日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一握の砂

石川啄木

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/